

# 「在宅家族の会」開催

2022年11月26日に初めての「在宅家族の会」が開かれました。家族を自宅で看取られた方や、現在も介護をしている家族の方などが集まって色々な話をするのが「在宅家族の会」です。

この会を開いたきっかけは機関紙「みらい」に載ったある記事で



した。内容はご夫婦2人暮らしで夫の看取りを在宅でされた方のインタビュー。「自宅で看取りなんて出来ない」と考えていた奥さんが、周りの方の支えや、また夫の「最期は自宅で」という想いもあったことで、自宅で看取りを決断されたという記事。この記事を読まれたある方からのお願いがこの会を開くきっかけになりました。(記事は「機関紙「みらい」2022年7月Vol.124」に掲載)

## ●「この人と話してみたい」

在宅で夫の介護をしているAさんは、この記事を読んで「この人と話してみたい」と訪問看護の看護師に声をかけました。Aさんは現在夫と2人暮らし。ほとんど寝たきりの夫を訪問看護やデイケアなども利用しながら在宅で介護

文責／みらい編集委員

しています。さっそく看護師が記事の奥さん(以下Bさん)に連絡を取ると、Bさんも快く了承。また数年前に夫を亡くされ、気持ちが沈んでいるというCさんにもお声をかけてみると参加してみたいとのこと、「在宅家族の会」の開催が決まりました。

## ●「次は2か月後ね」

会の当日は初めから皆さん打ち解けられた様子で、夫自慢に花が咲きました。思い起こせば、つらいことより夫のいいことばかり：『愛されていたんだな』と思う事、やさしかった生前のことなど話が尽きず、あっという間に2時間がたちました。心に残ったのは、亡くなった人の話題は、親せきや知人、友人、兄弟でも分かってもらえないと思う、やはり経験した者

同士でないかわかりあえないこともあるんだな：としみじみと話されていたことでした。

「もっと早くしてほしかった」、「次は2か月後ね」と会は楽しく終了しました。会を開いた看護師からは、「コロナ禍になってから久しぶりに清々しい思い」と、「やってよかった、継続していこう」と想いを新たにした声が聞かれました。

## ●訪問看護師の想い〜遺された家族への訪問を行って〜

今回の会を開いた経緯を看護師さんにも聞きました。

「訪問看護ステーションさくら通りでは、不定期ですが亡くなられた方の家族へ訪問をしています。

きっかけは、お看取りした後、その家族はどうされているんだろうという気がかりと、せっかく医療福祉協と結びつきが出来たんだから、縁が切れてしまうのは寂しい、つながりを継続したいという思いからです。また仲間づくり、居場所づくりにお誘いして地域で

ささえあいが出来たらいいねという事で開始しました。

訪問すると涙が止まらず、ただ一緒に泣く時もありました。思い出話を聞いて、生前の患者さんの新たな面が垣間見えることもあります。ある家では亡くなられた本人のカラオケを録音されていて、『朝から寝るまで聞いているんです、十八番の歌を聞いてやってください』と、聞かせてもらったりしたこともありました。私たちも、訪問を喜んでもらい、幸せな時間をいただき、また元気な表情に安心したりと貴重な時間を共有させていただいています。そしてまた明日から元気に頑張ろうと力をもらっています」



## ●これから

「これまででは、ご遺族の方と、訪問の看護師とだけでお話してその後はなかなか結び付いていないのが現状でした。また、遺族同士で交流したい、話を聞いてほしい、聞きたい、そんなニーズがあることも思いつきませんでした。先日、とある学習会で遺族の方、医師、看護師、理学療法士など色々な職種が集まり、患者さん同士や、スタッフがメンタル面でのフォローをされているのを見て、今までの活動は点と点でしかなかったこと、これを線にして、面にして行く事で新たな展開ができると思いました」

大阪きづがわ医療福祉生協では、患者や利用者本人だけでなく、その生活を支える家族にも寄り添いながらケアを行っています。今回の記事を読まれた皆様、ご感想をお寄せください。

